

「秋らしくなりましたね」「陽射しが優しくなりました」「秋の落日のつるべ落とし」など、日本語での挨拶の中にはたくさん季節を表した言い回しがありますね。雨が降れば「鬱陶しいですね」、晴れ続きなら「ひと雨恋しいですね」、「だいぶ寒くなりましたね」と問われると「多分山では雪でしょう」など、自分には直接関係がないのですが、どうしてもお天気に絡めて挨拶をしてしまいます。以前聞いた話ですがある日本人がフランス人に「よく雨が降りますね」と非常に日本的な挨拶をしたところ「それは私のせいではありません」と非常にフランス人的な回答が来て困ってしまったとのことでした。確かに元々狩猟民族が多かった欧州では雨が降ろうが雪が降ろうが、獲物を見つけるとそれを仕留めるまで粘り強く追いかける本能が残っているようです。逆に農耕民族が多かった日本人は、一年を分析し、1年1度の「お天道様との大博打」をかけて稲作を行い、みんな協力し合って翌年の食料を確保する本能があるようです。この二つの本能の違いが今でも仕事などに現れているようです。私の元職場のベルギー人同僚は、仕事のターゲットを上司から伝えられると、何度もその目標を達成するために、手を変え品を変えて挑戦していました。ちょっとは考えて計画を立ててから行動すればと思ったのですが、彼らにはまず行動を起こすことが目標達成への近道だと考えていたようでした。逆に私達日本人スタッフが目標を与えられると、綿密に計画を練り、予測可能な全ての事項を盛り込んだ計画が出来上がってから行動に入る傾向が強かったように思っています。ベルギー人同僚達はまるで狩人が獲物を狙い、いくつも矢を放つように行動し、我々日本人スタッフは田を耕し、天候を読み、そして稲作を始めるような行動だったと記憶しています。

このように文化背景が異なる者同士は文化背景が同じ者同士以上に意思疎通を図る必要があると思います。そのためには言葉がとても重要になってきます。そんな言葉、つまり言語について考えられたことがありますか。現在世界で使用されている言語(方言などを除く)は千数百から数千までであると言われています。しかし実際には消え行く言語もあり、生まれ来る言語もありますので、実態は不明だというのが言語学会の常識になっています。その内、各国の国語及び公用語とされているのは97言語あるそうです。もちろん方言などは含まれていません。何度かこのコラムに書いたことがあります。私の趣味の1つに「言語辞書の収集」があります。訪れたところの言葉の辞書を集める作業です。断っておきますが、辞書があるからその言語がわかるわけではありません。しかし旅先の思い出にと思い集め続けています。さて言語の話に戻しましょう。この小さな国ベルギーでさえも公用語(公の場において使われる言語)が三つあります。フランス語とオランダ語とドイツ語です。しかし厳密にはフランス語は「ベルギーフランス語」であり、オランダ語は「フランダース語」なのです(ベルギードイツ語に関してはまだ勉強不足なのでコメントを控えます)。「ベルギーで話されているフランス語って普通のフランス語では？」と思うのが当然なのですが、実は微妙に違う点があります。数字の数え方などが典型的なものですが、比較的古いフランス語が残っていると言われています。どれだけ違うのか興味のある方は「ベルギーフランス語辞書」がありますので、一読されてみてはと思います。また「ブラッセル方言辞書」もライブラリーの中にあります。一方オランダ語。これは「フラムス語」と呼ばれるオランダ語でベルギーのフランデレン地方で話されているオランダ語であり、オランダ語の方言ではなく一社会言語だとされています。その考えから言うと「低地ドイツ語方言の1つ」であるオランダ語の仲間であるから、ドイツ語の一方言とも言うことができるそうです。実は辞書の収集を始めてから困っていることがあります。それは未だに「フラムス語(フランダース語、フラマン語)の辞書がライブラリーに入っていないことなのです。一説によるとフラムス語は使われている地域が非常に細分化されていて、リンブルフ州の人と西フランデレン州の人の会話はフラムス語よりも英語の方が順調に行われるそうです。実際アントワープの大学で学んだ人が続きをヘントの大学で学ぼうとして、その言葉の違いに戸惑ったという話も耳にしたことがあります。またフラムス語のテレビ番組の中ではフラムス語を字幕を付けて放送している番組も見たことがあります。実際にフラムス語はわかりませんが、その話者と字幕との間に音声の大きな違いがあることを見つけ出すこともあります。それだけ多様化しているフラムス語、その辞書を見つけようと書店を訪れますが、中々見つからないのが現状です。フラムス人にももしそのような辞書を見つければ購入しておいて欲しいと頼んでいます。まだ見つからないようですが。

さて私事ですがこの夏、久々にスイスを訪れました。名峰「ユングフラウ」を見るために登山電車でユングフラウヨッホまで足を伸ばしたりしましたが、今回の目的は「1. 飼い犬(バーニーズマウンテンドッグ)の原産地を訪れること。2. ベルン近郊の街でドイツ語とフランス語の境目を実際に辿ってみる事。3. 懸案となっていたレト・ロマンシュ語の辞書を購入すること」の三つでした。さて1ですが、観光案内所やホテルのレセプションなどで訪ね歩きましたが、結局「原産地はベルンである」こと

は確認できましたが、それ以上の事は何もわからずに終わってしまいました。勿論予め色々な情報を集める作業をしていなかったことも準備不足でしたし、また現地で話されているドイツ語がさっぱり解らないため、折角インターネットでサイトを見つけても、それ以上突っ込んだ情報を得ることができなかったことも原因でした。しかし、ベルンの観光案内所やホテルの人たちはスイス原産の犬と言えば「セントバーナード」だと確信しているほど、バーニーズはマイナーな犬種のようなものでした。実際、ベルンの街では一頭もバーニーズを見かけることができませんでした(非常に当たり前の話なんです)。2ですが、これも肩透かしに終わりました。ベルンから30キロほど離れた Fribourg/Freiburg というサリーヌ川に囲まれた街を訪ね、フランス語とドイツ語の境目を求めてウロウロしました。サリーヌ川が言語境界線だと言われているため、その辺りを中心に散歩し、街中の表示などがどこで変わるかを確かめて歩きました。ところが予想に反して、街の表示はフランス語。そして街を歩く人達の会話もフランス語。とても両方の言葉が存在する街とは思えませんでした。観光案内所で訊ねてみると、住民の大多数はフランス語を使っているとのこと。小学校の教育もフランス語で行われ、ドイツ語教育は家庭によって行われているとのことでした。フランダー州からワロン州に入った瞬間から表示の変わるベルギーと違い、その境界線は非常に曖昧だったのです。3については大きな収穫がありました。この「レト・ロマンシュ語」はスイス東南部で使われている言語で、現在使用人口が3万5千人程度しかない非常に特殊な言葉です。実際の使用者の年齢が高齢化しており、このままでは絶滅する言語のひとつなのですが、立派なスイスの国語の1つに指定されています(因みに公用語としては指定されていません)。ベルン滞在の初日に一番大きな書店を訪ね、「レト・ロマンシュ語」の辞書が存在するのかどうかを聞いて見ました。店員さんがすぐに PC で調べてくれた結果、ドイツ語との対訳の辞書なら存在することがわかりました。ところがお店には在庫がなく、取り寄せになるとのこと。3日しか滞在しないことを告げると、翌日に入荷できるように手配すると約束してくれました。夕方の発注で翌日の午後には配達されると聞いて、その敏速なサービスに驚きました。そして翌日の夕方にお店に行くと、ちゃんと入荷していました。そしてついでに「ベルン地方ドイツ語方言辞書」「スイス・ドイツ語辞書」なども求め、収穫の多い旅になりました。

スイスはベルギーと同じように異なった言葉を話す国民で形成されている国です。しかし、異なった言葉を話す人たちに対する考え方はベルギーとはかなり違うように感じました。スイス人の多くは相手の言葉が自分達言葉と違うとき、進んで英語を使って、お互いの立場を同じにして話をするそうです。今回は短い旅でしたが、スイスという小国を訪ね、改めて言葉の大切さ、意思疎通の大切さを感じました。

《 つづく 》